様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０２５２７

研究課題名（和文）エミール・ゾラとフランス人権同盟

研究課題名（英文）Emile Zola and the Human Rights League of France

研究代表者
寺田　寅彦（Terada, Torahiko）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：３０５５４４５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：１９世紀末から２０世紀初頭のフランスを揺るがしたドレフュス事件で、文筆家であるエミール・ゾラの告発文「余は糾弾す」が大きな役割を果たしたことは周知の事実である。しかし、人権擁護団体であるフランス人権同盟がゾラの死後に作家の名声を擁護するためにさまざまな活動をしたことは忘れられがちである。さらにはゾラの死後に結成された「エミール・ゾラの友の会」がフランス人権同盟と深い関わるもので、ゾラ歿後の作家の擁護に果たした役割については、ゾラ研究者からもほぼ顧みられることがなかった。本研究はこの欠落を埋める端緒となるものであり、ゾラの別荘であったメダンの館の意味をあらためて問うものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現在のフランスでは、エミール・ゾラは１９世紀を代表する作家として知られ、中・高等教育で必ず取り上げられる文学者である。しかし２０世紀前半ではゾラは必ずしも学術的な研究対象ではなく、ましてや教材になることはなかった。それはゾラと左翼的社会活動との結びつきが強かったためであった。ゾラ作品の受容の転換と、２０世紀前半の社会的・文学的な役割を理解するには、ゾラの死後に結成された「エミール・ゾラの友の会」の活動と、フランス人権同盟との結びつき、さらにはゾラの別荘であったメダンの館の役割を知る必要がある。風化しつつある２０世紀前半のゾラ理解に光を当てる点で、本研究は学術的・社会的な貢献をなしている。

研究成果の概要（英文）：The Human Rights League - known as LDH (= Ligue des Droits de l’Homme) - of France is a Human Rights association to observe, defend and promulgation of Rights Man within the French Republic. The League was founded in 1898 Ludovic Trarieux to defend captain Alfred Dreyfus in the Dreyfus Affair. All researchers give importance to “J’accuse… !”, an open letter that was published on 13 January 1898 in the newspaper L'Aurore by Emile Zola in this Affair but LDH’s activities to defend the author of Les Rougon-Macquart series after his death happened in 1902 are not famous. Moreover, few research is interested in the association, "Les amis de Zola", which had a solid link with the LDH. What were their activities? What was his goal? Our research attempts to fill this gap and show the real significance of the "Villa de Medan" which was Zola's second home.

研究分野：フランス文学

キーワード：エミール・ゾラ　フランス人権同盟　ドレフュス事件

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

１９世紀末から２０世紀初頭のフランスを揺るがしたドレフュス事件で、文筆家であるエミール・ゾラの告発文「余は糾弾す」が大きな役割を果たしたことは周知の事実である。しかし、人権擁護団体であるフランス人権同盟がゾラの死後に作家の名声を擁護するためにさまざまな活動をしたことは忘れられがちである。さらにはゾラの死後に結成された「エミール・ゾラの友の会」がフランス人権同盟と深い関わるもので、ゾラ歿後の作家の擁護に果たした役割については、ゾラ研究者からもほぼ顧みられることがなかった。本研究はこの欠落を埋める端緒となるものであり、ゾラの別荘であったメダンの館の意味をあらためて問う必要があったことが本研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

現在のフランスでは、エミール・ゾラは１９世紀を代表する作家として知られ、中・高等教育で必ず取り上げられる文学者である。しかし２０世紀前半ではゾラは必ずしも学術的な研究対象ではなく、ましてや教材になることはなかった。それはゾラと左翼的社会活動との結びつきが強かったためであった。ゾラ作品の受容の転換と、２０世紀前半の社会的・文学的な役割を理解するには、ゾラの死後に結成された「エミール・ゾラの友の会」の活動と、フランス人権同盟との結びつき、さらにはゾラの別荘であったメダンの館の役割を知る必要がある。風化しつつある２０世紀前半のゾラ理解に光を当てることが本研究の目的である。

３．研究の方法

エミール・ゾラにかかわる資料は十分に整備されており、また出版・HP 上での公開がなされているものもあることから、研究書も数が多い。しかし、ゾラ未亡人のアレクサンドリーヌをはじめ、ゾラの周辺の人物については基本的な研究書はあるものの、それらはゾラを主軸においた研究であると言わざるを得ない。そのため、すでに研究書で扱われている資料についても、あらためて原資料を研究・精査し、また整備されていない資料を検討しなくてはならない。とりわけゾラの別荘であったメダンの館は、ゾラの「巡礼」の記念行事が今なお毎年行われているにもかかわらず、その「巡礼」の発端にあったフランス人権同盟との結びつきは中心的なテーマとして議論されているとは言えない。メダンの館の位置づけ自体が、小児科病棟としてパリ病院組織に寄付したゾラ未亡人と、ゾラの博物館設営を目指したゾラの娘との間で見解の相違があり、博物館設営後は小児科病棟であったメダンの館の運営の歴史がまったく顧みられない状態となっているためである。しかし、ゾラ未亡人のメダンの館の寄付は、貧困層・低年齢・病人という社会的弱者の最たる存在の人権を守ろうとする試みであったことは明らかである。二十世紀前半にゾラがどのように受容されたかを理解するうえで重要な部分であることを意識しつつ、現存するさまざまな資料を地道に検討しなおすことが本研究の方法となる。

４．研究成果

平成 28 年度には、フランスにおける基礎調査を進めた。従来からフランス国立図書館手稿部においてゾラの生前・没後のフランス人権同盟関係者からの書簡について調査を行っていたが、さらにゾラの別荘があった Médan 村が属する Yveline 県の県立古文書資料室での調査を実施した。その結果、ゾラ没後の動産、不動産の贈与と人権同盟運動との結びつきを示す原資料を開始することができた。この調査結果から、パリ病院（AP-HP, Assistance Publique, Hopitaux de Paris）資料室に未公開の資料が多数発見された。一方でこのゾラと人権同盟の結びつきが、ゾラの小説家・美術批評家としての活動や、ドレフュス事件での活動の中でどのような意味を用いるのかの分析を行った。ゾラは「真実は前進する」という信念を持ち、また同名の文書を書いたことで知られているが、その「真実」の内実がどのように学術的に分析され得るかが検討された。その結果、この「真実」が、フランス人権同盟の活動の点かいとあわせて理解される必要が、あらためて浮き彫りになった。また、セザンヌのようにゾラと交流の深い画家との結びつきにも、ゾラ没後の人権同盟の活動を見出すことができることをシンポジウム発表で論じた。

平成 29 年度には、パリ病院資料室やフランス国立図書館に所蔵されている資料・手稿・書簡の調査を行った。ゾラ未亡人の遺言書コピーがパリ病院資料室から発見されたことは大きな成果であった。フランス人権同盟のメンバーを中心として、ゾラ没後に発足した「エミール・ゾラの会」の活動拠点のひとつであったメダンの館の法的位置づけがこの書類から明らかになった。また「エミール・ゾラの会」の中心人物の一人であったモーリス・ルブランとサン＝ジョルジュ・ド・ブエリエの文学活動の分析を詳細に行うことで、「エミール・ゾラの会」活動の文学・思想的背景を明確にすることができた。加えて 1952 年と 1968 年にゾラ特集号を出した Europe 誌の分析から、第二次世界大戦後のゾラ研究の動向と、現在のゾラ研究の差異を詳細に検討するこができた。1968 年のシンポジウムを境に、マルクス主義的ゾラ理解が大幅に後退して、現在の大学中心の文学分析に移行することが明確になった。

平成 30 年度には、パリ病院資料室やフランス国立図書館に所蔵されている資料や手紙・手稿

といった前年度からの継続調査に加えて、近現代テクスト手稿研究所（ITEM, Institut des textes et manuscrits modernes）のゾラ・センターに所属するジャン＝セバスティアン・マケ（Jean-Sebastien Macke）氏の研究協力を得て、ゾラの友人の音楽家アルフレッド・ブリュノの調査を進めた。また、「エミール・ゾラの会」の活動拠点のひとつであったメダンの館について、さらに「エミール・ゾラの会」がゾラの故郷エックス・アン・プロヴァンスでどのような活動を行ったかについて、国際シンポジウムでの発表を行った。なお、「エミール・ゾラの会」とは直接関係はないものの、今回の調査で明らかになった資料を生かして、ゾラと同じく自然主義作家とみなされたギィ・ド・モーパッサンの諸作品について論文を発表した。さらに Sciences-Po 歴史センター（Centre d'histoire de Sciences-Po）に所蔵されていたルイ・ディスパン・ド・フロラン（Louis Dispan de Floran）の資料調査も順調に進み、同時にこのルイ・ディスパン・ド・フロランと人権同盟とのつながりについてさらに調査を行う必要が明らかとなった。

平成 31 年度（令和元年度）には、とりわけメダンの村での調査が進んだ。ゾラの別邸は「メダンの館」として知られ、「エミール・ゾラの会」の毎年の巡礼の地でもあるが、ゾラの死後、未亡人がパリ市病院に寄付したことから小児科病棟としてふだんは使われていた。この利用については今までほとんど知られてこなかったが、パリ市病院資料室で見つかった病棟への患者の登録台帳とメダン村に残る死亡届の台帳の突合せを行うことで、病院の運営の実態が初めて明らかになった。現在はゾラの記念館となっている「メダンの館」が病院から記念館になる経緯は、今まではゾラの娘であるドゥニーズ・ゾラの証言しかなく、病院としての「メダンの館」があたかも無意味な存在であるかのような言説しかなかったが、運営の実態が明らかになることで社会的に大きな役割を果たしていることが明らかになった。このことからゾラの死後から 1950 年代までの「メダンの館」の位置づけは根底から認識を覆すことが可能となった。病院として社会的に役立つ存在としての「メダンの館」の姿は、人権同盟やゾラの未亡人アレクサンドリーヌの社会的な活動と一致するものであり、現在はまったく顧みられることがないものである。一方で地方における人権同盟の活動についてはエックス・アン・プロヴァンスでのゾラの彫像の設置式を巡っての右翼との対立を明らかにすることができた。

令和 2 年度は、予定では本研究課題の最終年度であったが、コロナ禍のためにすべての現地調査と招聘企画が実施不可能となった。そのため、最終年度を次年度に延長した。コロナ禍で行った最後の調査であった 2020 年 2 月のゾラと人権同盟の関係を探る調査資料をもとに、同時代の 19 世紀末の自然主義文学の受け止められ方をゾラと同じく自然主義作家と見なされたギィ・ド・モーパッサンの作品を題材に論じることができた。

令和 3 年度は、コロナ禍が続き、最終年度をさらに次年度に再延長する措置を取った。しかしながら、夏にフランス・パリでの現地調査を行い、その成果を国際シンポジウムで「La vie etait la lumiere des hommes」としてゾラを思想家・詩人として紹介した人権同盟の活動にかかわる発表を行うことができた。さらに、この現地調査がきっかけで、ドレフュス事件にかかわるフランスにおけるユダヤ問題を取り上げるセミナーを開催することができた。ユダヤ問題の碩学ピエール・ビルンボーム（パリ第一大学教授）、プルースト研究者で近年ではプルーストとユダヤ問題での論考もある村上祐二（京都大学准教授）と寺田寅彦で、「ピエール・ビルンボームと読む『共和国と豚』」と題した本セミナーはオンラインで開催され、主催の自然主義研究会のみならず歴史学、社会学、近現代文学の広い分野からの参加を得ることができた。ただ調査が不足していることは否めず、再延長を堅持した。

令和 4 年度のゾラと人権同盟にかかわる研究は、とりわけアルフレッド・ブリュノに焦点を当てることとなった。ゾラの死後に人権同盟が「エミール・ゾラの友の会」を結成するが、この中でもっとも重要な役割を担った人物の一人が友の会の副会長であったブリュノであったからである。ゾラがリヴレ（台本）を執筆し、ブリュノが作曲した歌劇『メシドール』については、散文で書かれたことへの批判、ブリュノの作曲へのゾラの「介入」、労働を中心とする理想的共同体形成が従来の研究（Jean-Sebastien Macke、Jean-Max Guieu、田中琢三、林信蔵、等々）で指摘されている。本研究では、ブリュノの友人であったエチエンヌ・デトランジュ（Etienne Destranges）にかかわる資料を用いることで、従来の指摘を補強し、かつ『メシドール』がデトランジュの住むナントのような地方都市で具体的にどのように受容されたかを、美学的観点からも社会的観点からも検討することができた。本研究をもとにして、日仏会館シンポジウムにおいて発表を行うことができた。さらに、研究活動で得られた学術交流から、ソルボンヌ・ヌーヴェル大学のエレオノール・ルヴェルジィによる講演会を実現し、第三共和政における鏡の表象の役割とゾラ文学作品の関わりについて知見を深めることができた。

研究期間全体に得られた成果は、人権同盟がゾラの死後に、ゾラ称揚の活動を行うなかで、「巡礼」に象徴されるような「殉教者」としてのイベントを行い、その「聖別」を背景としたゾラの作品擁護が行われていたことが明らかになったことである。また、今までは、存在意義自体が見いだされてこなかったメダンの館を用いたゾラ病院の設立の経緯と運営の実態について調査を進めることができた。今後さらにこの領域で研究を進める必要がある。

以上

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 寺田寅彦	４．巻 26
２．論文標題 エミール・ゾラと人権同盟ーー彫像をめぐって	５．発行年 2021年
３．雑誌名 超域文化科学紀要	６．最初と最後の頁 109-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 寺田寅彦	４．巻 7
２．論文標題 La vie etait la lumiere des hommes	５．発行年 2022年
３．雑誌名 LITTERA	６．最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Torahiko Terada	４．巻 Automne (秋)
２．論文標題 Les editions illustrees des contes de Guy de Maupassant : procedes photomecaniques et strategies editoriales	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Textimage	６．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 寺田寅彦	４．巻 105
２．論文標題 『ギィ・ド・モーパッサン短編選集』と現代書物愛好家協会	５．発行年 2019年
３．雑誌名 比較文学研究	６．最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Torahiko TERADA	4．巻 V
2．論文標題 L’imaginaire qui se dresse	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Ecritures V. Systemes d'ecriture, imaginaire lettre	6．最初と最後の頁 325-331
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺田寅彦	4．巻 21
2．論文標題 エミール・ゾラ、真実の美学	5．発行年 2016年
3．雑誌名 超域文化科学紀要	6．最初と最後の頁 33頁-51頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 Torahiko Terada
2．発表標題 La vie etait la lumiere des hommes
3．学会等名 日本フランス語フランス文学会主催国際シンポジウム「19世紀の文学における生気論の諸相」
4．発表年 2021年

1．発表者名 寺田寅彦
2．発表標題 セザンヌとゾラ：記憶の場
3．学会等名 国際シンポジウム「セザンヌとゾラの創造的関係を再考する」
4．発表年 2018年

１．発表者名 寺田寅彦
２．発表標題 ゾラとセザンヌ、その没後
３．学会等名 日仏美術学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 寺田寅彦
２．発表標題 エミール・ゾラとオペラの舞台
３．学会等名 日仏会館シンポジウム「総合芸術としてのパリ・オペラ座―建築、美術、オペラ、バレエ、文学の交差―」
４．発表年 2022年

１．発表者名 寺田寅彦
２．発表標題 「ゾラと人権同盟」
３．学会等名 自然主義研究会オンラインセミナー「ピエール・ビルンボームと読む『共和国と豚』」
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Baetens, Jan、Simon-Oikawa, Marianne、北村 陽子、千葉 文夫、吉村 和明、吉田 典子、寺田 寅彦、森田 直子、稲賀 繁美、谷川 多佳子、都 潤貞	４．発行年 2018年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 263
３．書名 テクストとイメージ ： アンヌ=マリー・クリスタンへのオマージュ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究期間全体に得られた成果は、人権同盟がゾラの死後に、ゾラ称揚の活動を行うなかで、「巡礼」に象徴されるような「殉教者」としてのイベントを行い、その「聖別」を背景としたゾラの作品擁護が行われていたことが明らかになったことである。また、今までは、存在意義自体が見いだされてこなかったメダンの館を用いたゾラ病院の設立の経緯と運営の実態について調査を進めることができた。今後さらにこの領域で研究を進める必要がある。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 オンラインセミナー「ピエール・ビルンボームと読む『共和国と豚』」	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 講演会エレオノール・ルヴェルジィ「ゾラのルーゴン・マッカール叢書における鏡―記憶と真実の間」	開催年 2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関